



## 平成21年度東北大学史料館企画展 マンボウ青春記 の仙台-北杜夫と東北大学医学部-

著者	曾根原 理
雑誌名	東北大学史料館紀要
巻	5
ページ	102-122
発行年	2010-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/46143">http://hdl.handle.net/10097/46143</a>

## 平成 21 年度東北大学史料館企画展 マンボウ青春記の仙台－北杜夫と東北大学医学部－

会場：東北大学史料館 2 階展示室

会期：平成 21 年 (2009) 9 月 10 日 (木) ～ 11 月 13 日 (金)

曾根原 理

### 1. 企画概要

史料館では東北大学の歴史に関して、明治の学生群像 (2006 年)、学徒出陣 (2005 年)、教養部 (2008 年) などを取り上げて展示を行ってきた。そうした蓄積を生かしつつ、今年度は、昭和 20 年代の東北大学を取り上げた。

戦後の東北大学の卒業生は、わずかに小田和正 (1947 ～、歌手) や田中耕一 (1959 ～、ノーベル賞受賞者) などの例外はあるものの、アカデミズムの世界では著名ながら一般の知名度はごく低い例が多い。そうした中で北杜夫 (1927 ～) は、日本を代表する歌人・斎藤茂吉の次男で、本人も芥川賞作家として知られ、さらに「どくどくマンボウ」として一世を風靡した存在であったが、長く東北大学との関係が論じられることは稀だった。その理由は、北氏が卒業後のほとんどを東京で活動し、仙台との縁は薄かったことによる。しかし、2007 年の 100 周年記念展示のアンケートに、東北大学の著名な卒業生である北氏の展示を希望する声があった。また、戦後の混乱期は比較的史料の乏しい時期であるが、北氏の著書『どくどくマンボウ青春記』に描かれたことで、私たちは当時の東北大学や仙台について多くを知ることができる。そこから、同書の記述を利用することで、その時期の主に医学部の教員や学生たちを中心とする展示を企画した。

昨年の反省 (展示期間の最後は寒冷の度が増した) をふまえ、今年度の企画展示は時期を早めた。また例年同様に、A 4 版カラー印刷 8 頁のパンフレットを無料配布し、会場でアンケートを実施することを行った。

### 2. 展示構成 (全体を 5 つの部分から構成した)

#### (1) 松本から仙台へ

東北大学出身の恩師 (古川久) や、斎藤茂吉と仙台アララギ派など、東北大学入学の背景となった人脈をさぐる。また、松本高校以来の同級生

**マンボウ青春記の仙台**  
— 北杜夫と東北大学医学部 —

2009年 9月10日 (木) ～ 11月13日 (金)

開館時間  
平日 10:00 ～ 17:00  
土日祝日 10:00 ～ 16:00

東北大学史料館 2 階展示室 入館無料

関連行事  
「いずみんあじあ」展 入館無料 (展示内容についてはこちらをご覧ください)

公開講演  
どくどくマンボウ家の素顔  
斎藤 由香氏 (エッセイスト・作家)  
9月12日 (土) 14:00 ～ 15:40

演劇上演  
セリニアンとの隣者とときめく春の  
— どくどくマンボウの仙台 —  
NPO 法人劇団仙台小劇場  
10月4日 (日) ①11:00 ～ ②14:00 ～  
(2部上演 観劇料 400 円)

展示ガイド  
10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

東北大学史料館  
〒980-8577 仙台青葉区片平2-1-1  
青葉区一丁目 (バス停より徒歩10分)  
東北大学正門前バス停より徒歩1分 (駐車場はございませんので、公共交通機関等をご利用下さい。)  
電話 022-217-5040 <http://www.archives.tohoku.ac.jp/>

### 展示案内

マンボウ青春記の仙台－北杜夫と東北大学医学部－

『どくどくマンボウ青春記』などと呼ばれる青年作家の北杜夫は、昭和 20 年に東北大学医学部に入学するまで、仙台で育ち、この仙台の地で、後に『どくどくマンボウ青春記』に書いている。今回の展示は、この本の記述などによって、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

※期間中、常設展示「歴史のなかの東北大学」もご覧いただけます。



#### 関連行事

会場：史料館 1 階 (法科大学院第 4 講義室) 入館無料 (注：入館の際は、電話予約のうえでご来館ください)

#### 講演会

◎日時：9月12日 (土) 14:00 ～ 15:40

◎講師：どくどくマンボウ家の素顔

斎藤 由香氏 (エッセイスト・作家)

◎内容：北杜夫の素顔と、戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎講師：斎藤 由香氏

◎日時：10月4日 (日) ①11:00 ～ ②14:00

◎講師：セリニアンとの隣者とときめく春の

— どくどくマンボウの仙台 —

◎講師：NPO 法人劇団仙台小劇場

◎内容：北杜夫の著書『どくどくマンボウ青春記』を基に、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。

◎日時：10月24日 (土) 14:00 ～ 16:00

◎講師：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

◎内容：今回の展示を紹介し、戦前・戦中・戦後の東北大学と北杜夫の関係を、展示資料を駆使して紹介する。



展示チラシ (表・裏)

4 名の紹介も行う。

(2) 昭和 20 年代の医学部

北氏が入学した時期の東北大学医学部について、黒川学部長や教授たち、同級生たち、さらに戦争の影響、授業や学生生活の様子など、当時の様子を示す資料を展示する。

(3) 「青春記」の中の東北大学

『どくとるマンボウ青春記』に登場する教授たちや出来事の実像について、当時の資料（大学時代のノートを世田谷文学館から借用）や写真を用いて紹介する。

(4) 保証人・河野与一先生

東北大学での保証人を、父・茂吉から依頼された河野与一夫妻について、『どくとるマンボウ青春記』の記述を引用しながら、当時の資料や写真から紹介する。

(5) 文学者への道

在学中に活字になった初期作品の写真や、初期の代表作『幽霊』の草稿（世田谷文学館から借用）を展示する。また、ペンネーム誕生の事情や、憧れのトーマス・マン関係の展示も設ける。

### 3. 関連行事など

(1) 講演会

日時：9 月 12 日（土）14:00 ～ 16:00

講師：斎藤 由香 氏（エッセイスト・会社員）

（サントリーホールディングス・株式会社アドギア勤務。現在、週刊新潮に「窓際OL すってんころりん日記」を連載中。著書に、自らの会社生活をもとに綴った『窓際OL トホホな朝ウフフな夜』『窓際OL 会社はいつもてんやわんや』『窓際OL 親と上司は選べない』、歌人・斎藤茂吉の妻である祖母・輝子の生涯を描いた『猛女とよばれた淑女』、父・北杜夫との共著『パパは楽しい躁うつ病』、叔父・斎藤茂太との共著『モタ先生と窓際OLの人づきあいがラクになる本』などがある）

演題：どくとるマンボウ家の素顔

内容：祖父で歌人の斎藤茂吉、その妻・斎藤輝子をはじめとする、斎藤一族の個性豊かな実像を語り、話は自身にも及ぶ。

会場：法科大学院第4講義室（史料館1階）→希望者多数のため金属材料研究所講堂に変更

(2) 演劇上演

日時：10 月 4 日（日）① 11:00 ～ ② 14:00 ～

出演：NPO法人劇団仙台小劇場

（結成 40 年を迎える仙台の老舗劇団の一つ。地域に愛される劇団を目指し、教育・環境問題をはじめとして、地域の物語を積極的に舞台化している。2004 年 5 月より NPO 法人化。2006 年には「遠い火ー仙台における魯迅ー」を中国（北京・上海）で上演。現在は学生、会社員、公務員、教師、主婦など、20 代から 70 代に至る幅

広い年代層の12名)

演題：セリニアンの隠者 ときめく春の宵—どくとるマンボウの仙台—

内容：戦争の焼け跡から復興に向けて歩みはじめていた仙台を舞台に繰り広げられるさまざまな人々との交友の軌跡。東北大学時代の友人の証言をもとに北杜夫の青春の華やぎと孤独とを垣間見る書き下ろし的一幕劇。

会場：法科大学院第4講義室（史料館1階）

### (3) 展示ガイド

日時：10月24日（土）14:00～16:00

講師：曾根原 理（史料館）・石垣 政裕（経済学研究科）

演題：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

内容：今回の展示を担当した館員と、関連行事として10月4日に上演した演劇の台本作者が、準備や取材の過程で見聞したこと、展示の見どころ、上演の様子や台本の虚実などを解説。

会場：法科大学院第4講義室（史料館1階）



展示ガイドの様子

### (4) 映像上映

題目：①「北杜夫代表作『楡家の人びと』の誕生（約15分）」（世田谷文学館制作）

②「北杜夫を語る（約13分）」（関本英太郎・東北大学情報科学研究科教授チーム制作）

方式：展示会場内の受像機を使用

## 4. 結果

### (1) 入場者数

- ・展示室入場者数（9/10-11/13） 2054名
- ・9/12 講演会 149名
- ・10/4 演劇 51名（1回目20・2回目31）
- ・10/24 展示ガイド 10名

### (2) 展示アンケート

回収90枚（回収率4.4%）

（記載例）

- ・ビデオ（世田谷文学館作成）をみて、よく分かりました。（70代・卒業生）
- ・北杜夫をめぐる教授たちが面白かったです（30代・卒業生）
- ・本川弘一先生の厳しい講義の件など印象深く読みました。もっと何回も試験不合格のこと

を記しては如何！企画展があるとのことで『在る青春の日記』を読み返しましたが、同年代の者として、ただなつかしき一杯でした。息子（45 歳）が医学部で北杜夫の後輩にあたりますが、あまり知らない様子なので、本日帰宅したらぜひ見るように言っておきます。（70 代以上・一般）

- ・河野先生や級友達とのエピソード、現代に欠けがちなものが中にある。人間臭さというか、それがなくては生きる楽しみがない。母校（石巻高校）出身の大先輩、山形先生がこれほど偉大だと知ることができたのは、大きな収穫でした。思ったより、人が少なくてびっくりした。おかげでゆっくり見れましたが。（40 代・一般）
- ・本学工学部志望の受験生。来年から東北大学に通うつもりなので、よろしくお願いします。（10 代・高校生）
- ・精神分裂症における微細精神運動の一考察（北氏博士論文）の要約をみてみたい。（50 代・一般）
- ・当時の学生の生活が面白かったです。試験のヤマをはったり、外れたり、合宿を楽しんだり、いつの時代でも学生の姿は変わらないものだなあと思いました。（20 代・一般）
- ・全部において、大変興味深く、又、ファンでもあるので、ビデオ（史料館作成）に関しては大変うれしく思いました。（特にサンマのくだり……）。ビデオで生の声、姿を見ることができ、又、友人達のお話を伺うことができ、うれしかったです。（50 代・一般）
- ・(1) 北杜夫が有名になる前の展示が乏しいと感じました。東北大学医学部入学を「強制」された、という父・茂吉の宗吉宛手紙、及び医学部在学中宗吉に宛てた父・茂吉の手紙のコピー（或いは印刷）を展示すれば、宗吉の医学部入学／在学時のことがより理解できることでしょう。(2) 当時（戦後間もなく）の仙台の街の様子（駅舎・医学部キャンパス・番丁・昭和舎などの学寮）の写真もあれば、宗吉の暮らしぶりの理解になったことでしょう。（60 代・卒業生）
- ・北杜夫の文章と出てくる実在の人物が交互に展示されているところや講義ノートが印象に残りました。通史の展示がとてもおもしろかったです。（30 代・本学教職員）

### (3) 講演会アンケート

回収 21 枚（回収率 14%）

（記載例）

- ・元気あふれるユーモアたっぷりのお話は、とても楽しかった。ウツにならないコツもあり、現代人に必要なことだと思いました。健康食品についても非常に役に立った話で、海外への出張の話もイキイキ過ごすためにも、若者達のウツ病者引きこもり族の多い時代に、とても役に立つと思いました。私も 23 年に山の女専に東北大学本部正門を通り抜けて通学したので、北杜夫氏と同じ時代でした。
- ・大変面白い講演会でした。斎藤由香さんは原稿があるとも思われなような、とてもなめらかな語り口で長い時間お話をされて、とてもおもしろかったです。さすがに茂吉、北杜夫氏の血を感じました。このような講演会を企画実現して下さいの方々に感謝いたします。ただ、この講演を知ったのが、前日のニュースでした。もう少し広く知らせる方法を考

えて頂ければと、次回より期待いたします。

- ・(主催者側へ) ①斎藤由香氏の講演が「主」であるので、関係各位の説明の話は簡潔に願いたいものです。②マイクrofオンのテストは講演前に準備していただきたい。講師に対しての礼節です。(講師に対して) “事実は小説よりも奇なり” そのままにマンボウ家の回想のお話をされて、事実と由香氏の感想とあいまって大ロマン、波乱のドラマを聴くことができ、すばらしい時間を共有できましたことを感謝いたします。ありがとうございました。“由香さん、またおいで下さいませ。北杜夫氏のご健勝を祈ります。”
- ・斎藤由香さんの話は大変ユーモアがあり、しかし、元気づける話もあり、大変興味深く聞かせていただきました。今後の糧にしていきたいと思います。東京から聴きにきた甲斐がありました。
- ・由香さんの気さくでオープンな語りには好感がもてる。家族の裏話も興味深い。サントリーの広報活動めいた話もしゃささなく聞けた。全体的には、メリハリのきいた土曜日の午後にふさわしい楽しい講演でした。史料館の展示物を知らないのも、今日のような関連性のある講演会や発表会があると嬉しい。
- ・天真爛漫、自由奔放のお嬢さんの血筋を引いているんだと思います。周りに振り回されず、マイペースでまい進して下さい。とても楽しい話をありがとうございました。少女の頃、『ドクトルマンボー航海記』や『天国に一番近い島』でニューカレドニアのこと等読んでました。その時に私もニューカレドニアに行ってみたいと思ったものです。今からでも挑戦したいと思います。いくつになっても好奇心が大切ですね。
- ・輝子さんのようなパワーのある老婦人になりたいものです。エッセイと同時にお話もお上手ですね。由香さんの今後の仕事に期待が倍加しました。今後共、多方面に亘る講師のお話を伺いたいの、企画に期待します。

#### (4) 演劇アンケート

回収 16 枚 (回収率 31%)

(記載例)

- ・主役の方がとても北杜夫さんに似ていて、入り込んでしまいました。私も地元の者ではないけれど、この仙台を通過されて今の北杜夫さんがあると思うと、ものすごく近くに感じました。
- ・旧制松本高校から東北大学医学部の7年間の幅広い北杜夫君をよくまとめていただきました。最後の彼の作詞の松高寮歌なつかしく聞きました。
- ・古き仙台時代が知ることができ父母の仙台での学生時代はどんな暮らしだったのかと思いました。
- ・新しい演劇のスタイルで面白かったです。
- ・北杜夫の一面にふれることができ、楽しく観ました。私も卓球部だったので。方言など当時の生活事情などわかって、おもしろかったです。
- ・北杜夫さんの「白きたおやかな峰」を、尾根歩きが好きで、串田孫一さんや加藤丈太郎さんなどの登山家の本とともに読んで、カラコルム山系への登攀の想いをいただきました。

東北大学山岳部のニエンチェンタングラの登頂に参加した学生さんも近くにいたこと、松本や仙台に住んでいたことが、今回、マンボウ青春記からかいま見られて良かったです。北杜夫さんが、ぐっと近くに感じられるようになりました。

- ・本で読んだものが実直に表れていて、臨場感もあって良かったです。

## 「マンボウ青春記の仙台」展示資料等一覧

- ・導入部を 0 とし、前述の展示構成 1～5 を大区分、その下に小区分を設け番号を付した。
- ・写真パネルは【写】、人物パネルは【人】で表記した（写真は省略）。
- ・『どくとるマンボウ青春記』の引用箇所は、実際の展示ではマンボウのマークで示したが、ここでは㊦で代用した。

### 0-1 ごあいさつ

今年度の企画展示として、「マンボウ青春記の仙台―北杜夫と東北大学医学部―」を開催することになりました。

『どくとるマンボウ航海記』などで知られる芥川賞作家の北杜夫は、昭和 23 年（1948）に東北大学医学部に入学するため、仙台にやってきました。医学部に進んだのは、父・斎藤茂吉（歌人として有名ですが、精神病院の院長でもありました）の「強制」だったようですが、仙台の地が選ばれたのは、高校時代を過ごした松本にも通じる、北国への憧れがあったといえます。

当時、敗戦後の混乱の中で、東北大学は新たな出発を迎えていました。全国的には新制大学への切り替えや、医学部では後に大きな問題となるインターン制度の導入などが行われた時期です。戦争の爪痕が教員や学生の心に深く刻まれていた一方で、再出発に際しての連帯や、たくましい生活力が発揮された時代でもありました。

物資不足のためか、昭和 20 年代は史料の乏しい時代です。ところが仙台については、北杜夫の『どくとるマンボウ青春記』に記されたことで、記憶が残されました。そこには、当時の学生生活の様子や、個性的な教授たちの姿が生き生きと描かれています。

今回の展示は、この本の記述などによって、彼が在学した昭和 20 年代の東北大学そして仙台について、写真や関連資料を展示することで、現在につながる戦後の東北大学の出発点を考えたいと思います。昨年度の「教養部」展に一部重ねあわせながら、時

代によって変化する大学の姿、時代を超えて存在する学生の志を感じて頂ければ幸いです。

平成 21 年 9 月 東北大学史料館

### 0-2 北杜夫 関係年表

昭和 2 年（1927） 5 月 1 日、斎藤茂吉・輝子夫妻の次男として東京で誕生（本名：宗吉）

15 年（1940） 4 月、麻布中学校に入学 13 歳

19 年（1944） 3 月、松本高校を受験するが失敗し、麻布中学の 5 年に復学する 17 歳

20 年（1945） 1 月、松本高校を受験し合格する／5 月、東京大空襲で青山の自宅と病院が全焼／6 月、松本に赴き思誠寮に入る 18 歳

23 年（1948） 4 月、東北大学医学部入学／『文学集団』に、北宗夫の筆名で「あの頃の歌」が掲載される 21 歳

24 年（1949）『文学集団』にたびたび詩が掲載される 22 歳

25 年（1950）『文芸首都』に、北杜夫の筆名で「百蛾譜」や「狂詩」が掲載される／「幽霊」を書き始める 23 歳

26 年（1951） 11 月、父・茂吉に文化勲章が授与される 24 歳

27 年（1952） 3 月、卒業し、仙台でインターン生活を送る／8 月、「牧神の午後」発表 25 歳

28 年（1953） 2 月、父・斎藤茂吉が逝去／5 月、慶応大学医学部の医局に入局し、仙台を去る／6 月、医師国家試験に合格 26 歳

29 年 (1954) 10 月、『幽霊』を自費出版 27 歳  
 30 年 (1955) 8 月、トーマス・マン逝去 28 歳  
 31 年 (1956) 12 月、1 年ほど派遣されていた山梨  
 県立病院から慶応の医局に戻る 29 歳  
 32 年 (1957) 5 月、無給助手から有給助手に昇任  
 30 歳  
 33 年 (1958) 11 月、水産庁漁業調査船の船医とな  
 り、欧州方面へ出港する 31 歳  
 34 年 (1959) 4 月、ハンブルクやリュウベックや  
 パリの思い出を胸に帰国 32 歳  
 35 年 (1960) 3 月、『どくとるマンボウ航海記』を  
 出版し、一躍人気作家となる／7 月、『夜と霧の隅で』  
 で芥川賞を受賞／10 月、「精神分裂症における微細  
 精神運動の一考察」で博士号を得る 33 歳  
 (その後、作家として活躍)  
 平成 21 年 (2009) 1 月、娘との対談『パパは楽し  
 い躁うつ病』を朝日新聞出版から刊行／3 月、『マ  
 ンボウ最後のバクチ』を新潮社から刊行／9 月現  
 在、軽い鬱 82 歳

0-3 北杜夫 関係地図 (昭和 27 年「仙台市街明細  
 地図」使用) (内容省略)

### 1-1 仙台との縁

東北大学を受験した頃について、北 杜夫 (本名：  
 斎藤宗吉) は次のように回想している。

㊦私は父の強制で医学部を受けねばならなかったし、  
 東大の医学部にはとても合格できぬときっぱりと考  
 えたから、東北大学を受けた。そこの医学部によい  
 教授が多いという理由より、なにがなし仙台という  
 名に憧れたのである。松本という城下町は、私の想  
 像以上に気に入った町であった。仙台にも、東北の  
 木の香のごときものが漂っていることだろう、と私  
 は想像した。(中略)

ところが、いざやってきた仙台は、空爆で中心部  
 があらかたやられていて、砂埃の多い、殺風景な、  
 木の香なんぞはほとんどない、都会とも田舎とも  
 つかぬ場所であった。古い城下町のなごりなど、ノ  
 ミ取りマナコで捜さねばならなかった。都会には都  
 会の、田舎には田舎の情緒がある。しかし、昭和  
 二十三年の仙台は、その両方から中途半端で、のっ  
 ぺら棒な索漠たる眺めにすぎないように思われた。

最後は「忘れがたい懐かしい場所」となった仙台  
 との出会い、こうして始まった。

1-1-1 【写】旧制松本高校 平成 19 年重要文化財  
 指定／左から本館正面・教室 (復元)・中庭

### 1-1-2 小宮豊隆書簡 (柴田治三郎あて)

〔昭和 19 年 (1944)〕10 月 17 日付

北杜夫が松本高校時代に師事した古川久は、学生  
 時代は東北帝国大学法文学部で、岡崎義恵教授の  
 もとで国文学を専攻していた。岡崎の同僚である小  
 宮豊隆も、古川に漱石全集の仕事を手伝わせたりし  
 ていた。この手紙では、松本高校に勤務した古川の、  
 学生とともに汗を流していた様子を伝えている。小  
 宮は斎藤茂吉と、立石寺の「岩にしみいる」声で鳴  
 いた蟬の種類を論争したこともある。(史料館・柴  
 田文書)

### 【翻刻】

手紙ありがたう。いろいろこき使はれて計りゐて  
 ちっとも勉強が出来ないさうだが、是は何所でも同  
 様で、君一人が悪いのでもなんでもないから、あま  
 りあせらない方がいいと思ふ。古川久といふのは岡  
 崎君の国文を出て、目下松本高等学校にゐるが、是  
 なんかも夏は名古屋の工場に、九月は伊奈町の飛行  
 場作りに、十月はまた春日井の工場に、自家の席暖  
 まる違もなく監督に出されて、精根を疲らしつつあ  
 る。それでも割に学生にいくらかでも学問的な芸術  
 的な空気に親しみを持たせたいといふので、学生の  
 為の設備その他を考えてやり、それに生き甲斐を見  
 出さうとしてゐる。古川は健康で裕福で子供も丈夫  
 なやうだから、さう言ふ事もしてゐられるとも言へ  
 るかも知れないが、然し気の持ちやう一つ、君だっ  
 ていくらかでも寛ろぐ事が出来るのではないかと思  
 ふ。(以下省略)

### 1-1-3 【人】古川久 (ふるかわ ひさし 1909-94)

日本文学の研究者。特に能・狂言の研究で知られ  
 る一方、芭蕉や馬琴などの近世文学研究や、夏目漱  
 石研究でも多くの業績を残した。

名古屋で育ち、愛知医科大学予科に入学するが、  
 石田元季の俳諧史を学び文学研究を志す。同大学か  
 ら東北帝国大学に移った太田正雄 (木下杢太郎) を  
 頼り、20 歳で東北帝国大学法文学部の聴講生となる。



23 歳で卒業して程なく東京に移り、能楽研究を進める一方、小宮豊隆の漱石全集作成を手伝う。33 歳の昭和 17 年に松本高校教授となり、戦中・戦後の困難を生徒と共にする。北杜夫や辻邦生らは当時の生徒である。41 歳の昭和 25 年、旧制高校廃止を機に、宇都宮大学教授に移る。その後、東京女子大学や東京農工大学、武蔵野女子大学短期大学部で研究・教育に励む一方、学界や文化行政の場でも活躍した。多くの門下生により、還暦記念の随筆集『くちなしの花』、古希記念の『菊豆腐』が刊行された。

## 1-2 松本高校の同級生

昭和 23 年の春、受験のため乗りこんだ上野発の汽車の中で、同級生 3 名（北、宇留賀、前沢）は先輩の浪人生（篠原）を目撃する。最初は、「浪人ってのは、一年間受験勉強してたのだから。おれたち勝てっこないな」など噂していたが、「のこのこ私たちの席にやってきて」いざ同席することになったら、この先輩は、後輩たちの会話についていけず、「……うむ、こうしてみると、おれの知らんことがずいぶんあるってことだなあ」と嘆息した。席を外した際に、「まあ、あの先輩にはわるいが、これで競争相手が一人減った」と噂する後輩 3 人。さて受験の結果は……

㊤ところで試験の結果であるが、私たち松高勢はあっぱれ全員合格した。私の級友の二人が合格したのはまず順当であり、私のは奇蹟に近く、この先輩の合格は奇蹟そのものといってよかった。かくのごとく奇蹟がたびたび起こるので、この世はまだ保っているのである。

1-2-1 【写】松本高校からの同級生 左から北・宇留賀・篠原・前沢（昭和 23 年）

## 1-3 斎藤茂吉と仙台

山形県出身の斎藤茂吉には、同県出身の阿部次郎（1883-1959 当時東北帝国大学法文学部教授）をはじめ、仙台には少なくない知人がいた。息子に関して茂吉が頼りにしたのは、まず保証人をお願いした河野與一で、加えて扇畑忠雄、山形敏一などのアララギ派歌人たちであった。仙台で 3 番目の下宿を提供した伊達宗雄もまた、彼らの一人である。

㊤本来なら、父の知合いに近寄るのは禁物といえたが、当時の食糧事情、下宿難、また私の経済状態ではやむを得なかった。（中略）

ひそかに私を監視していたらしい伊達さんが、これも致し方ない親切心から父へ手紙を出した模様であった。「どうも御息は、少しも学校に行かれぬようです」

私が講義に出ぬのは単にものを書こうと決意したためであったが、父はなんとこれを即座に女と結びつけ、いきなり次のようなハガキを寄こした。

「女というものはこわいものだから、絶対に近寄ってはならぬ！」

これには私もほとほとあきれ、こんな親を持ったのはなんの因果かと更めて諦念したのである。

### 1-3-1 斎藤茂吉著『柿本人麿（評釈編）』（岩波書店）

昭和 14 年発行

斎藤茂吉から阿部次郎に献呈された著書。両者は、同じ山形県出身者として、気持ちが通じ合っていたといわれる。本書について北杜夫は、「人麿デパートというような非常にユニークな書物だけど……学術書としてはある意味で、ある部分は否定すべき書物」と感想を述べている。（東北大学附属図書館・阿部文庫）

### 1-3-2 群山叢書（むらやまそうしょ） 昭和 25 年創刊

アララギ派短歌の地方誌として、昭和 21 年（1946）に創刊された『群山』は、「現実の追求と生新な表現」を掲げ、多くの会員が参加するに至った。そこに集った歌人個々の歌集が次々に刊行された。

扇畑忠雄『北西風』（群山叢書 第 1 編）群山発行所  
昭和 25 年 7 月

山形敏一『時計塔』（群山叢書 第 23 編）中山書店  
昭和 38 年 6 月

伊達宗雄『故園』（群山叢書 第 3 編）群山発行所  
昭和 53 年 4 月

（すべて東北大学附属図書館所蔵）

### 1-3-3 【人】扇畑忠雄（おおぎはた ただお 1911-2005）

在職：二高 1942-50 教養部 1950-74

日本文学の研究者で歌人。旅順で生まれ、9 歳の

とき父が逝去したため祖父母の地広島に移る。中学時代に歌を作り始め、19歳のときアララギに入会する。翌年、広島高校を卒業して京都帝国大学文学部に入学し、24歳の昭和10年に卒業（卒業論文は「賀茂真淵の万葉学」）。京都府立第一高等女学校教諭を経て、31歳の昭和17年に第二高等学校教授となって仙台に赴任。仙台空襲に際しては、アララギ会員名簿副本を火災から守り（原本は東京空襲で焼失）、戦後の同会の復興に寄与した。昭和21年に東北アララギ会を結成し「群山」を創刊、その編集責任者となる。39歳の昭和25年に東北大学助教授に転じ、同32年に教授、同42年に教養部長となる（大学紛争による過労で2年後に辞任）。昭和49年に退官後も、研究・教育や実作に励み、平成14年には宮中歌会始に招かれるなど、東北地方の文化活動に寄与した。

#### 1-3-4 【人】伊達宗雄（だて むねお 1896-1983）

宮城の教育者で歌人。伊達一族の家に生まれる。札幌農科大学予科を経て、東北帝国大学理学部に入学した。卒業後は女子師範や女子大学の教員を勤めた。一方で、大正12年にアララギに入会し、扇畑忠雄が東北アララギ会を結成した際には、会員の中心となって「群山」の刊行を支えた。歌集として、『故園』（1978年）と『おもだか』（1982年）が、東北アララギ会群山発行所から刊行されている。

#### 1-3-5 【人】山形徹一（やまがた しょういち 1913-98）

在職：医学部 1942-76

宮城県出身。石巻中学校では、扇谷正造（後に朝日新聞社）と首席を争い、第二高等学校では対校クルー舵手として驚異的記録で全国制覇を達成した。東北帝国大学医学部に入学し、卒業後は昭和32年に黒川利雄の後任として内科第三講座の教授となった。消化器病学、臨床血液学、臨床細胞学などを中心に研究し、多くの人材を育てた。また、黒川利雄が道を開いた胃の集団検診を継続し、宮城県から始まった日本の集団検診の普及に大きな貢献をした。一方で、東北大学評議員や、日本学術会議会員として、学内外で活躍した。

昭和32年に武藤完雄の後任として東北大学漕艇部長となり、五輪出場や全日本選手権優勝を果たした。大学生の時に入会して以来、アララギ派の

歌人として知られ、昭和56年には歌会始に入選した。専門の医学書のほか、昭和60年に『日本人は百二十歳まで生きられる』という著書を刊行している。

#### 1-3-6

㊤むかし、石原純が原阿佐緒と恋をしたことがある。それは史上に残る大恋愛であったが、そんな恋愛は石原博士の才能を殺す懸念があるとアララギの同輩である父（＝斎藤茂吉）たちは判定し、二人を引離そうとした。再三にわたって彼を説き伏せようとしたのだが、相手はがんとして応じようとせぬ。はじめ、さりげない世間話をしているうちは、石原博士はにこにこしてごく普通に應對しているのだが、いったん女のことにわずかでも触れると、とたんに黙りこくって一言も口をきかなくなってしまう。これにはさすがの父も往生したらしい。

「いいかね、黙あーってしまうんだぞ」

父は私たち年少の学生にむかって、昂奮した口調で言い、更に激昂して、

「それではわしも困るではないか！」

という、私たちが笑いをこらえるのに苦労した台詞を吐いた。（後略）

#### 1-3-7 布施・石原等絵葉書（真島 利行あて）

大正2年（1913）9月21日付

外遊中の石原（当時東北帝国大学理科大学物理学の助教授、翌年帰国し教授）が、布施 現之助（翌年帰国し、東北帝国大学医科大学解剖学教授）等と連名で出した手紙。スイス・チューリッヒの消印がある。（史料館・真島文書）

#### 1-3-8 石原 純 書簡（池辺 常刀あて）

〔大正12年（1923）〕10月4日付

東北帝国大学を辞職した年、原阿佐緒と暮らしていた保田（千葉県）から出した手紙。関東大震災の被害を案じている。（史料館・池辺文書）



展示風景

## 2-1 同級生たち

昭和 23 年（1948）医学部入学の 100 名余は、大多数が昭和 20 年の旧制高校入学者である。中学生当時は困難な戦局のため、旧制中学の年限が 5 年から 4 年に短縮され、卒業後 3 ヶ月間の勤労働員を経て、7 月に旧制高校に入学、その 1 ヶ月半後に敗戦を迎えた。

大学入試は、混乱・窮乏状態のため、受験票、問題用紙、解答用紙なども、粗末な紙にガリ版印刷されたものだった。応募倍率は約 3 倍で、合格者の出身校は、順に旧制二高 35 名、弘前高校 30 名、山形高校 10 名、水戸高校 5 名であり、松本高校 4 名は 5 番目に多い出身校だった。

クラスでは野球チームが編成され、2 年次の時は学内対抗戦で優勝した。バッテリー要員は宗吉、俊二の両斎藤はじめ小野寺 敏勝、前沢 潭などがいた。富永忠弘が自ら組織したフォア（4 人漕ぎの種目）の漕手として全日本漕艇選手権大会で優勝し日本一になった。占領軍のイールズ教育顧問による、東北大学における反共産主義講演会が、学生の猛反対で阻止された「イールズ事件」では、授業前の空き時間に伊藤昭一により説明がなされた。（『艮陵同窓会 120 年史』所収「マンボウの仲間たち」より）

### 2-1-1 昭和 20 年代の出来事

**昭和 21 年** 3 月、長町分院（～昭和 55）の開院式／9 月に卒業したクラスから、1 年間の実地修練（インターン）制度を導入／医師国家試験の開始

**22 年** 7 月、前年 9 月にカスリン台風で流出した鳴子分院（～平成 6）の再建開院式／10 月、「東北帝国大学」の名称を「東北大学」に変更

**23 年** 内科教授・黒川利雄が学部長に（→ 32 年総長：共に卒業生として初）

**24 年** 5 月、「附属医院」の名称を「附属病院」に変更

**26 年** 4 月入学の学生から新制に移行

**27 年** 4 月、初めての女子学生入学／同月、附属看護学校（～昭和 50）と附属助産婦学校（～昭和 54）を設置

**28 年** 8 月、附属診療エックス線技師学校（～昭和 44）を設置／旧制入学学生の大半が卒業

**2-1-2 【写】同級生たち**（昭和 27 年卒業アルバムから）

**2-1-3 【写】実習中の松本高校出身 4 名** 左から前沢・篠原・北・宇留賀

### 2-1-4 河野 肆尚 宣誓文

昭和 23 年（1948）4 月 28 日

東北大学の入学式において、医学部新入生を代表して「学業に励み心身を鍛え」ることを誓ったもの。（史料館所蔵）

### 2-1-5 式次第書

昭和 27 年（1952）3 月 25 日

東北大学の卒業式の式次第。他学部の新入生と並んで、医学部卒業生 103 名の総代として、村木忠雄の名が見える。（史料館所蔵）

## 2-2 戦争の痕跡

現在も刊行が続いている「艮陵新聞」（昭和 35 年刊行開始）の前身に、昭和 26 年 4 月から翌年 12 月まで発行された「旧艮陵新聞」と称すべきものがある。10 号で息切れして廃刊となったが、そこには、当時の医学部のさまざまな様子が盛り込まれていた。

私たちの入学した昭和 22 年頃の仙台は、まだ戦災の跡も生々しく諸所に残り、私たちの学生生活は物質的に非常に惨めなものでした。（中略）私たちは青年はあまりにも純粋であったために、いまだ完全にその（敗戦の）精神的ショックより回復しないうちに医学部に入学してきたのです。（中略）初恋に破れて苦悩する若者のように、内気で用心深く、臆病で猜疑的でした。この精神的不安定の状態も、やがて社会情勢の安定とともに次第に落ち着いて、2 年、3 年の間は比較的学問に専心することができました。ところが 4 年の第 1 学期に起った朝鮮の不幸な戦争によって、また私の思想の安定は綻られて、第二の動揺曲線を描くようになりました。（中略）人類の幸福のために奉仕すべき科学が、逆に人類の絶滅を速めるための凶器としか利用されないとは何と悲しむべき現実でしょう。（「艮陵新聞」2 号掲載「一卒業生の言葉」）

### 2-2-1 原子展に思う！

「私も仙台で空襲をうけ、全く火に包まれあちこち逃げまわり、ついに手足に火傷をうけ、平時なら痕もなく治ったであろう火傷も治療がよく出来なかったために化膿し、やっと醜いナルベを残して一月後に歩けるようになった経験があるので、まったく他人のこととは思わずに(ハーシ著『ヒロシマ』を)読んだ。日本人もすっかり戦争は懲りたと思ったのに、また戦争放棄の憲法を改めるとか、再軍備とか唱えるもののあるのは全く嘆かわしい」(3年生A)

「この会場への入場者は1万名くらいだったそうですが、仙台市の人口からいって決して多いとはいえません」(3年生K)

「古賀教授は学生を集めて原爆症について講義をして下さった。医学部内の各方面から色々のご協力を頂いた。」(2年生W)

#### 予備隊医募集

警察予備隊では、今度医官を増募することに決定……最近の内外の新聞報道によれば、日米安全保障条約およびサンフランシスコ講和により、再軍備は必然とされ、あるいはまた、再軍備は警察予備隊の増募により始められていると既定の事実として報道されている。予備隊医は事実上「軍医」となることは必至とみられている。……経済的困窮に苦しんでいる医学生にとって、この制度は経済的には受け入れられそうであるが、一方、再軍備反対、平和を望む声も益々増大して来ている折から、相当の問題となる向きが強い。

(ともに「長陵新聞」6号、昭和26年12月発行より)

### 2-2-2 【人】古賀良彦(こが よしひこ 1901-67)

在職：医学部 1933-64

福岡県出身。熊本の第五高等学校を卒業後、九州帝国大学医学部に進み、卒業後に内科学教室のレントゲン室主任であった中島良貞の指導を受けた。中島が、旧制帝国大学で初めて設置された九大放射線科学教室教授に就任したことから、同教室に移籍し、昭和7年10月に助教授となった。その後、中島教授の方針に従い、昭和8年に東北帝国大学の皮膚科学講座講師に転任する。降格人事であり、X線検査の必要性が薄い部門であり、しかも内科の教授たちからX線診断は自分たちがするので手を出さなくてよろしい、といわれたという。こうした試練にも

負けず、間接撮影法や断層撮影法の研究に打ち込み、昭和17年に放射線医学講座初代教授となった。その後、間接撮影法は結核や胃の検診に採用され、世に多大の貢献をなした。CTの原理となる回転横断撮影法により文化勲章を受章した高橋信次は、古賀の門下生の一人である。

### 2-2-3 卒業アルバム

昭和27年(1952)

東北大学医学部の卒業アルバム。本展示の教授や仙台の風景は、主にこのアルバムの写真を利用している。(医学分館所蔵)

### 2-3 医学祭

医学部では、3年に一度「医学祭」が開かれる。戦後第1回は、昭和22年に開催された。「マンボウの仲間たち」が参加したのは、昭和25年の第2回(6月2～4日)である。

学内公開の中心は、基礎医学教室を公開しての解剖・病理・法医・生理・公衆衛生などのほか、内科・産婦人科・皮膚科の展示などで、他に共催として美術展、写真部展覧会、音楽会なども催された。以下は、記憶に残った出来事の例。

医学部正門にMの形のアーチをとりつけ(医学=Medical)、女医の卵たちが紙で作ったバラを飾り付けているところに、大石武一代議士(医学部OB)が通りかかり激励された。

法医学教室では「首吊りの理論」を扱った。観客の評判よく、新聞に紹介された。

問題：ある朝ブドウ畑に一体の変死体が発見された。

自殺だろうか？他殺だろうか？

検討：図表により窒息死の所見を示し、縊死・絞死・扼死を説明

判定：絞殺された後、自殺を装わせるために縊死の姿勢をとらせたものと断定

避妊コーナーで、コンドーム等を使い荻野式の説明をしたところ、見学に来た保健婦の方が詳しく、逆に教育された。

### 2-3-1 月平均支出額(単位円)

	1 年	2 年	3 年	平均
自宅通学者	2083	2024	2037	2048
下宿通学者	5219	5780	5736	5578
寮学者	4367	4028	4536	4310
自炊通学者	3274	4333	4675	4094

…注目すべきは、奨学金 2100 円は自宅通学者の学費に一致していること…自宅通学者以外のものも家庭からの、またアルバイトによる収入がいかに困難であるかを物語っている。

寮生の食費は、金額的には下宿生の三分の二程度で済んでいることから、「学寮の拡充が叫ばれるのは当然である」と結論されている。（「艮陵新聞」5 号、昭和 26 年 11 月発行に掲載された、同年 9 月のアンケート結果による）

## 2-3-2 【写】医学祭の風景

## 2-3-3 【写】音楽会の風景

## 2-3-4 学生大会を開くに当って

昭和 23 年（1948）

当時の文部省が検討を進めていた「国立大学法案」に反対し、12 月 8 日に医学部中央講堂の入口に掲げられたもの。結局、参加者が少なく流会となった。（艮陵同窓会所蔵）

## 2-3-5 料金規定細則改正について

昭和 23 年（1948）6 月 1 日

大学病院における各種の料金は、戦後たびたび引き上げられた。当時の物価や、物資不足の様子が伺える資料の一つ。（史料館所蔵）

## 2-3-6 音楽会プログラム

昭和 25 年（1950）6 月 4 日

医学祭の期間に、大学祭参加企画として医学部中央講堂で音楽会が開かれたときのプログラム。バッハの合唱曲や管弦楽曲、ワグナーの合唱曲などが見える。（艮陵同窓会所蔵）

## 2-4 授業風景

昭和 23 年入学組の授業風景の一端を、『艮陵同窓会 120 年史』から覗いてみよう。

解剖実習は、学生 8～10 名に死体 1 つが当てられた。身元不明の行路病者が主であった。温暖な季節で、保存技術もなく、多くの蛆虫をピンセットでつまみ出しながらの実習であった。細菌学の授業では、学生を名簿順に四班に分け、当時助手をしていた石田名香雄などが指導して、微生物学応用の実験（乳酸菌飲料水作製など）が行われた。黒屋政彦教授の提案で、附属医学専門部生徒（廃校のため最終学年）との合同授業が行われたこともあった。

昭和 26 年 11 月発行「艮陵新聞」5 号の「与論調査報告」には、講義と実習に関する当時の学生たちの声が載せられている。「黒板からノート」という講義・試験のあり方を批判し、プリントを活用して講義を合理化・簡略化すること、講義と実習を平行させること等を望む声や、「顕微鏡を全員に貸与してもらいたい」という希望が載せられている。また、松田幸次郎教授（環境医学）と山崎正文教授（解剖学）、黒屋教授と永井博士との連合講義に対して多数の支持があったことなども記されている。

## 2-4-1 【人】黒屋政彦（くろや まさひこ 1897-1967）

在職：医学部 1938-60

東京都出身。東京帝国大学卒業後、ドイツ留学などを経て、昭和 13 年に東北帝国大学医学部教授となる。熊谷岱蔵教授（昭和 15～21 年総長）が、化学的な仕事の進め方に注目し招聘したと伝えられる。細菌の成分分析や、抗生物質、ウイルス研究などで大きな成果を挙げた。戦争によって外国文献の輸入が途絶えた頃、「チャーチル（英国首相）がカビの産生する物質で肺炎から直った」という南米経由の情報に励まされ、昭和 19 年に日本初のペニシリンの追認と臨床応用を実現した。

抗生物質研究のパイオニアとして活動する一方、昭和 30 年から医学部長となり（～32）、薬学科の設置を果たした（後に薬学部として独立）。日本細菌学会の会長もつとめた。同会は「黒屋奨学賞」を設けて、現在も新進気鋭の研究者を顕彰している。

## 2-4-2 【人】石田名香雄（いしだ なかお 1923-2009）

在職：医学部 1951-1989（学長 1983-89）

新潟県出身。第二高等学校を経て、東北帝国大学医学部に進む。終戦時には徹底抗戦の扇動に対抗し、学生会幹事として佐武医学部長臨席のもとで、戦争

終結の学生大会を開いた。翌年卒業後、黒屋教授のもとで昭和26年に助教授となり、同35年に細菌学の教授に就任した。研究は多岐にわたり、センダイウイルスの発見と構造・機能の研究、制癌性抗生物質ネオカルチノスタチンの発見、免疫抑制酸性蛋白の発見、B型肝炎ウイルスやインフルエンザウイルスに関する研究、インターフェロン誘起剤に関する研究などが主要なものである。昭和50年に医学部長(～54)、同58年に東北大学学長(～平1)。平成元年には仙台市名誉市民、同8年に勲一等瑞宝章を受章している。高校時代から漕艇に親しみ、昭和50年代には東北大学漕艇部長として、全日本選手権優勝や世界選手権出場を達成した。また『妙高』以下5冊の随筆集を著している。

### 2-4-3 医学部規定中改正

昭和21年(1946)4月17日

戦後の医学部規定の改正について、安倍能成(漱石門下で小宮豊隆の親友)が文部大臣として発令した書類。昭和14年に開設された航空医学講座の廃止(生理学第三講座を新設)や、カリキュラム改変の様子が窺える。(史料館所蔵)

## 2-5 教授たちの横顔

個性的な教授が多かった。以下、『艮陵同窓会120年史』の記事から。

一年の解剖学の時間に、山崎正文教授が講義をされながら毎回画かれた図は、まさに美しく芸術的だった。福山右門助教授の図は、朝登校するとすでに数種の色チョークで黒板全面に精密に画かれてあり、われわれは、なるべく講義が始まる前にそれをノートに写すことから一日が始まった。

吉田富三教授の試験は、全員60～85点の合格だったらしい。それは、同教授によれば、入試に合格した程素質のある学生が60点未満だとすれば、それは自分の教え方が悪かったためであり、また同じ理由で85点以上とれる筈はない、というものだった。

教授室における篠田紘教授の産科学の口頭試問形式の試験では、そうしないと教授のご機嫌が悪いという、先輩からの怪しげな引き継ぎにより、普段は別の服装の者も詰襟の学生服姿だった。

### 2-5-1 顕微鏡

昭和2年(1927)

東北大学医学部を昭和5年に卒業し、戦後は名古屋で87歳まで開業医をしていた水谷博氏が使用していたもの。(史料館所蔵)

### 2-5-2 試験傑作集(基礎編)

グルンドでは故布施教授、佐武教授、木村教授が三大難関でしたな。まず布施先生では、組織学の回答にLig nuchaeが当たって「ハイッ、リガメントウムナッケは」とやったら、「うーん君、それは何語かね。もう一度来給へ」とあっさりやられた。雪の降る黄昏時、しょんぼりと飲みにいったら、大先輩が飲んで居て「何悲観してる?」「実はこんなことで布施さんにヴーコンくいました」「なんだ、そんなことで悲観する奴があるか。俺はなあ、Oesophagusが当たって「ハイッ、オエゾファグスは…」とやったら、「うーん、君、講義に出たことあるのかね」とヴーコンさ。あっはっは」と慰められた。まことに有難き先輩であった。今は水沢で病院長をして居られる。(中略)木村先生、通称男ちゃんの試験は、これ最大難関。トリなら軽い方、ヘキサあたり迄あり。明日は卒業式というのに夜遅く迄ウンウンやってるのが毎年二、三人居た。男ちゃんサデイズムでないかと言う奴もいた位。……第四問など、満州馬のペニスの話だけしか記憶していない同級生の大部分が、「ライツに依って馬のペニスに生じるクレブス」と書いたので、早速「ライツに依ってペニスにクレブス出来るんなら、早晚諸君のペニスは皆クレブスになる」と大いに喜ばれた。もちろんヴーダーコンメン。(『艮陵新聞』7号より)

### 2-5-3 用語解説

グルンド:(独)gurund (意味)基礎(医学)

(羅)Lig nuchae:(発音)リガメントウムヌヘー  
(意味)項靱帯

ヴーコン(ヴーダーコンメンの略):

(独)wiederkommen (意味)またおいで=再試験

(独)Oesophagus:(発音)エソファグス  
(意味)食道

トリ:(羅)tri (意味)3回目(の試験)

ヘキサ:(羅)hexa (意味)6回目(の試験)

ライツ:(独)Reiz (意味)刺激

クレブス：(独) Krebs (意味) 癌

## 2-5-4 【人】篠田 紘 (しのだ ただし 1892-1987)

在職：医学部 1939-1956

佐賀県出身。大正 6 年に東京帝国大学を卒業後、最初は外科に入局し、塩田広重教授から座右の銘となった「鬼手仏心」の心構えを教えられた。その後婦人科に転じ、広島病院産婦人科医長などを経て、昭和 14 年に東北帝国大学教授として仙台に赴任した。ライフワークは不妊症。子宮卵管造影法に工夫をこらした結果、不妊症診断が飛躍的に改善された。昭和 23 年に日本婦人科学会の会長となり、大正 4 年以来分裂状態であった近畿婦人科学会を統合して、新たに日本産科婦人科学会を結成した。昭和 23 年から 28 年には、附属病院長をつとめ、病院管理学講座の設置のため尽力した。昭和 31 年の退官後は、岩手医科大学の学長、翌年には理事長。大学院医学研究科の設置、歯学部の開校、病棟や図書館などの竣工をなしとげ、「中興の祖」と呼ばれ、逝去の際は大学葬が執り行われた。

## 2-5-5 篠田 紘 教授肖像画

(制作年未詳)

洋画家で、仙台市名誉市民でもある杉村惇（すぎむらじゅん 1907-2001）が描いた作品。長く産婦人科教室で保管されてきた。(史料館所蔵)



展示風景

## 3-1 試験対策

『どくとのマンボウ青春記』には、試験対策について詳細な記載がある。

③試験に関して有難かったのは前沢という松高の友人の存在で、彼は飲み仲間であったが、講義にだけはきちんと真面目に出、しかもそのノートが実に綺麗で読みやすいことであった。彼は私の後釜として山本先生の家（4 番目の下宿だった）に下宿していたが、私は試験の 3、4 日前から彼の部屋に泊まりこんで自分用の抜書きを作った。よい点を取ろうとしたなら、頭が混乱してしまって破滅してしまっただろう。しかし私は厳密に試験を通ることのみを目標としたから、60 点を取れる範囲で抜粋を作った。その簡単な抜粋ならどうにか覚えることができた。

次に私はヤマをかけるのに特殊技能があった。上級生から前年、前々年の問題を聞き、教授の心理に同化してヤマをかけるので、神技のごとくこれが当たった。(中略) 次に私は、自分の答案が何点くらいとれたかを正確に見極める能力があった……

### 3-1-1 北杜夫『或る青春の日記』より

○山崎の試験、ギリギリか？

○山かける。山出る。「ウワッ！出タ！」。とたんに忘れてしまう。

瀬戸君の試験。僕の山があたったので、「斎藤の山が出た、フテエ」とみんな言ったそうだ。

和田生理試験。問題二十一の中から二つ。総代がクジを引く。「体温の恒常性」は良いが、「消化管の運動」が出てウンザリした。六十点ぎりぎり辺りならんか。すぐを書くことが無くなってしまったので、教室からは二番目に出た。

パトロギイの試験。ナルベと、こともあろうに無心体。むろんできない。無心体などとは、どだい、初めて見る単語であった。

武藤外科。ヤマ出て何とか書けた。一番先に教室を出た。うつむいて、せかせかと、追われるように教場を出て、何かしらしきりに味気なかった。

### 3-1-2 【人】武藤完雄 (むとう まさお 1898-1972)

在職：医学部 1941-61

茨城県出身。旧制二高では柔道でならし、東北帝国大学卒業後、兵庫県立神戸病院（神戸大学医学部の前身）外科部長などを経て、昭和16年に外科の教授として仙台に赴任した。研究室の研究課題を、腎臓から消化器、呼吸器、心臓・血管などへ広く展開させた。自身は、胃癌の外科療法を生涯のテーマとした。内科の黒川利雄教授と親交が深く、消化器疾患の患者を黒川内科と武藤外科で協力して治療する体制が成立していた。「世の中にあてにならないもの」として、「新聞記事と統計学と女の涙」を挙げるのが口癖で、不正確なデータにもとづく統計を嫌った。臨床教育の過酷さの一方で、多忙の中でも卒業試験の口頭試問にたっぷり時間を割くなど、面倒見の良さでも知られていた。昭和21年から病院長（～23）、同32年から医学部長（～36）。退官後は福島県立医科大学の学長となった（～42）。

### 3-1-3 【人】石橋俊實 (いしばし としみ 1902-91)

在職：医学部 1948-66

宮城県出身。大正15年に東京帝国大学医学部を卒業後、北海道帝国大学教授を経て、昭和23年に東北帝国大学教授として仙台に赴任した。前任の丸井清泰教授は、アメリカ留学の際にフロイトの学説に接し、日本の精神分析学のパイオニアとなった。それに対し石橋は、精神分析室を脳波室に改造し、治療室を手術室に改装するなどして、外科的治療に重点を移した。また、当時の最先端技術であった前頭葉切截術を、東京帝国大学と前後して、いち早く取り入れた。これらの精神外科治療は、現在から見れば乱用気味で、全国的に人権上の問題を引き起こした。昭和30年代には、研究対象が脳波から異常児、非定型精神病、てんかん、知覚遮断などに広がりを見せた。また治療法も、外科手術やショック療法などから薬物療法や生活療法に重点を移した。変化の大きな時代に、多数の医局員を擁する精神医学教室を作り上げたと評される。

### 3-1-4 大学ノート 2冊

（昭和20年代）

北杜夫の自筆講義ノート。清書されたものらしく、赤で重要事項が示され書き直しも見えないことから、

「青春記」に登場する「60点を取れる範囲」の「抜粋」の類と推測される。1冊は表紙に「黒川」「Innere Medizin」とあることから、黒川利雄教授の内科のノートであろう。もう1冊は表紙に「精神科」「小児科学」とある。（世田谷文学館所蔵）

### 3-2 成功例

㊦解剖学の試験で、3問のうち2問の答が60点ぎりぎりくらいに推定された。もう一つの25点問題が「男性尿道」というのであった。……私はペニスの絵をさっと描き、真ん中に棒を引き、矢印をつけて「この中を通っている」とだけ記した。これは教授を激怒させるであろうが、教授が真面目であればそれだけ、この答に0点をつけるのを逡巡するのではないかと私は企んだのだ……私はこの試験を通過してしまった。

ある内科の教授はそのころ牛乳療法というのを研究しており、さまざまな病気に大量の牛乳を与えしかもそれが利尿作用もあって有効なのであった。この教授は尿ともオシッコとも言わず、お小水という丁寧な日本語を使用された……

私はその教授の試験に、関係ない病気の治療法にまで必ず牛乳のことをつけ加えた。「毎日一斗ずつ牛乳を飲用せしむると、お小水が実に大量に出……」おそらく教授はこの答案を読むとすっかり嬉しくなってしまう、十点ほど余分の点をくれたのではあるまいか。

### 3-2-1 山崎正文 (やまざき まさふみ 1902-53)

在職：医学部 1929-53

秋田県出身。昭和2年に東北大学医学部の卒業と同時に解剖学教室に入り、同4年に助教授、同16年に布施現之助教授の後任となった。発生学、組織学、細胞学を専門とし、特に血球の形成と成熟機構に関する多数の業績は『新血液学序説』（日本医書出版、昭和26年）に結実した。着任時から、自らが担当する第一講座だけでなく、教授が欠員であった第三講座を瀬戸八郎教授（第二講座主任）と分担していたが、昭和16年に瀬戸教授が徴兵されたため、数年間は学内外から応援をうけ講座を維持した。しかし、前任者の布施名誉教授から応援の申し出をうけた際は、「名誉教授には教育の分担を頼まない」という教授会の申し合わせに従い謝絶した。戦後、瀬



戸教授が復員し、解剖学教室は人材に満ち、自らも研究を発展させた。しかし、昭和 27 年から急速に体調を崩し、翌年 2 月に胃を切除した。一時回復をみせたが、同年 12 月に 51 歳で逝去。

### 3-2-2 中村隆（なかむら たかし 1907-99）

在職：医学部 1941-72

栃木県出身。昭和 9 年に東北帝国大学医学部を卒業後、熊谷岱蔵教授時代の内科に入局し、結核に関する研究、特に食餌療法に関する広汎な研究に取り組む。昭和 16 年に助教授となったが、徴兵され兵役に就いた。戦後、大里俊吾教授のもとで助教授に復帰し、高蛋白・高脂肪食の結核治療上の効果を実験的にも理論的にも証明した。また、塵肺や呼吸生理についても業績を重ね、珪肺の問題では武藤完雄教授による鉱山医学研究会の一翼を担った。昭和 26 年に教授に昇任し、門下生たちの研究グループが喘息、肺気腫、肺循環、心循環、肝循環など、さまざまな主題での研究を推進するのを総括指導した。その一方で、昭和 38 年から病院長（～40）、昭和 40 年から医学部長（～42）をつとめた。

### 3-2-3 講義ノート 4 冊

（昭和 20 年代）

昭和 25 年に医学専門部を卒業した益田勝児氏から寄贈されたもの。北杜夫が学生時代の医学部で教えた、精神医学の山村助教授、小児科の林教授、法医学の村上教授、整形外科の藤本教授の講義を記している。（良陵同窓会所蔵）

### 3-3 失敗例

㊦「試験のヤマが絶対に当らぬ効果……ウェーバー教授が「ブレイな！」と叫んで発明したため、世にこれを「ウェーバー・ブレイ効果」と呼ぶ。この効果の偉力たるや絶大、現にいまこの私も見事にヤマが外れ、問題を前に徒らに吐息をついている次第……」

さすがの文学的才能も大学では通用せず、私は見事に落第させられたばかりか……4 次試験まで受けさせられたものだ。しかし私は、本川教授を尊敬しているし好きでもある。人徳の中にユーモアがあったし、教だけでなく育もされる先生であったからだ。

法医学か何かの試験で……大胆にわずかなヤマしかやらなかった問題が完全に外れていて、二題が二つともまったく手がつけられぬことが一目でわかった。どうにも創作のしようもない。私はしばらくそれを眺めたのち、高校の流儀ですんでのところ、席を立ちかけた。しかし 30 分遅れてはいってきた私が 3 分間でまた出ていったら、クラスの連中はもっと笑うだろう。そう思って私はしばらく逡巡した。

と、いきなり隣の学生が自分の答案用紙をずっと私のほうに押してよこした……

### 3-3-1 【人】正宗一（まさむね はじめ 1896-1959）

在職：医学部 1942-59

岡山県出身で、詩人の正宗白鳥は従兄にあたる。九州帝国大学を卒業後、海外留学と母校の助教授、北海道帝国大学教授を経て、昭和 16 年に仙台に着任した。糖蛋白質化学を専門とし、血液型物質や、癌の高分子化学に多数の独創的研究を展開した。国内はもとより、海外でも「Japanese Group（日本学派）」と呼ばれ高く評価された。

生化学の分野は、物質の抽出や化学反応の時間配分により、24 時間体制で研究することが珍しくない。そのためか、正宗教授は医学部の正門前に家を借り、研究室と自宅を頻繁に往復した。講義においても、話をしながら次々に黒板に亀の子のベンゼン核や分子構造式を書いては消していくので、学生は大変忙しい思いをしたと伝えられている。ものを考えるときは、いつもタバコをくわえるチェンスモーカーで、定年後 1 年で心臓発作を起こし逝去した際に遺体解剖を行ったところ、心臓の冠状動脈が針金のように硬化していた。

### 3-3-2 【人】本川弘一（もとかわ こういち 1903-1971）

昭和期の医学者。石川県出身で、東京帝国大学医学部卒業後、日本で最初に「実験生理学」を提唱した橋田邦彦の指導をうけ、電気生理学的研究を行う。昭和 14 年（1939）11 月に東京帝国大学講師となり、翌月に東北帝国大学講師に転じ、翌 15 年教授となって生理学第二講座を担当する。昭和 29 年 1 月に色の感覚に関する研究で朝日文化賞、同年 5 月に脳電図の研究により学士院賞を受賞する。同 36 年（1961）4 月に医学部長、同 40 年 4 月に新設

の歯学部の初代学部長、同年11月には東北大学学長を歴任する。しかし学生運動が全国的に激化する中、昭和44年には東北大学でも校舎のバリケード封鎖や、学生の無期限ストライキが多発した。学長として、機動隊による川内キャンパスの封鎖解除に踏み切った結果、大学教育は機能停止状態になり、大量の留年者を出すなど混乱が続いた。こうした混乱に対処し、学長在任中に病没した。

### 3-3-3 本川 弘一 学長告辞原稿

昭和44年(1969)4月10日

入学式における告辞。「当面役に立つ専門的知識や技術は、当面の需要を充たすだけであり……むしろ諸君は大学において、個々の職業的知識ではなく、その基礎となる諸原理をよく理解修得し、また将来社会人として大切な人間関係の根本問題等をよく履修すべき」と説く。東京大学等の入試中止、青葉山地区の建築状況(工学部はほぼ完了、理学部・薬学科等が進行中)など、当時の状況を思わせる文章も見える。(史料館・本川文書)

### 3-3-4 本川 弘一 色紙

(昭和40年代など)

子供の頃、内職で九谷焼の絵付をし、画家になりたいと思ったこともあるという本川教授は、多くの色紙を残している。ただし、大学では教育・研究に没頭し、門下生たちも殆どこうした作品の存在を知らなかったという。昭和56年には丸善画廊において遺作展が行われている。(史料館・本川文書)

### 3-4 吉田教授との因縁

昭和28年2月25日、卒業後インターンをしていた仙台に、父・茂吉逝去の連絡が入る。夜行列車に乗り、翌朝帰京。10時ごろに僧侶が来て読経。その後、東京大学医学部で解剖が行われた。執刀は三宅教授と平福助教授で、吉田富三教授が見学に来ていた。

吉田先生は吉田肉腫の発見者で、東北大の教授から東大に移っておられた。初め、私はあの人は誰です？と西洋叔父に訊いたら、バカな、お前習ったはずだろうと叱られてしまった。(『或る青春の日記』)

吉田教授は、昭和26年に癌研究会議の招聘で渡

米し、その年度の朝日文化賞を受賞するなど活躍し、「艮陵新聞」にも大きく扱われている。それを知らなかったとすれば、どれほど大学に行っていなかったかが判明してしまう事実である。

### 3-4-1 【人】吉田富三(よしだ とみぞう 1903-1973)

在職：医学部 1944-52

福島県出身。上京し、第一高等学校、東京帝国大学医学部に進学した。大学卒業後に、佐々木隆興の研究所において、人工的に肝臓癌を発生させることに成功する。ドイツ留学と長崎医科大学教授を経て、昭和19年に東北帝国大学に着任。昭和18年に発見されていた腹水肉腫(後に「吉田肉腫」と呼ばれる)は、ラット飼育の都合上、東京の佐々木研究所で植え継がれ、吉田や関係者の超人的努力により空襲等の危機をしのぎ、戦後の癌研究に貢献した。昭和27年には東京大学病理学教授に転じ、昭和39年の退官後も癌研究に従事した。昭和34年には文化勲章を受章する。また二度にわたり国語審議会委員を委嘱され、方言のため府立一中受験を失敗して以来考えてきた、日本語の問題に関わった。

### 3-4-2 吉田 富三 草稿

昭和31年頃

ウィルヒョウ(Rudolf Virchow)著『細胞病理学』の翻訳原稿。吉田富三訳で、昭和32年(1957)に南山堂から刊行されている。子息の吉田直哉氏から寄贈された。(医学分館所蔵)

### 3-4-3 艮陵新聞 第3号/第7号

昭和26年7月/同27年1月

昭和26年から翌年にかけて、有志の熱意で復刊された医学部同窓会の新聞。吉田教授の活躍した箇所を展示する。医学部同窓会の定期刊行物は、戦後しばらく、有志が卒業すると廃刊となる状態が続いたが、昭和35年以降に新体制で組織と財政が確立され現在に至っている。(医学分館所蔵)

### 3-4-4 【写】医学部の風景 中庭の午後

### 3-4-5 【写】仙台の風景 屋上からの眺め

### 4-1 気さくな火星人

東北大学での保証人を頼まれたのは、河野與一（昭和 25 年 3 月まで法文学部教授）であった。最初に河野宅を訪れた時のことは、次のように記されている。

③仙台駅裏のガードをくぐり、狭いうらぶれた土の道を歩いていって、とある家の古風な土蔵の中に、この先生が漂渺と住んでいた。見ると、汚い着物にチャンチャンコを着、一般地球人とは様子が異なるお爺さんであった。頭蓋がでっかくて額がでっばって、これはウェルズの火星人が化けているのではあるまいかと、ひそかに私は考えたものだ。

しかし、この老火星人が、意外と気さくでやさしい言葉をかけてくれるので、私はひとまず安堵し、出された食物をみんな食べて引き上げた。

河野宅への行き帰りには「こわい」娼婦街を通らなければならなかったが、食物につられて時々尋ねるようになった。「やはり学者である奥様が忙しいときは、先生が自分で手ずから料理をこしらえるのであった。保証人で教授らしいところは少しもなかった」。

#### 4-1-1 河野夫妻書簡（斎藤 茂吉あて）

昭和 20 年（1945）10 月 19 日付

金瓶に疎開し不安定な生活をしていた茂吉に対し、10 日でも一月でも泊まりに来ませんか、と誘う内容。12 月になって茂吉から「非常にうれしく拝受、飛立つばかりであります」と返事が来たが、そのうち大石田に移転したりで、結局実現しなかった。（史料館所蔵）

#### 4-1-2 河野 與一 書簡（野口 明あて）

昭和 25 年（1950）3 月 26 日付

第二高等学校第 10 代校長で、その後お茶ノ水女子大学の初代学長となっていた野口に対し、「藤田君」のラテン語やギリシャ語の能力を保証する内容。「成城高校では一時生徒課長を」云々から、この年からお茶の水女子大学教授となり、後に同大学学長をつとめた藤田健治（1904-1993）に関するものと考えられる。（史料館・野口文書）

【翻刻】

先日来御多忙中おしかけがましくいろいろと御心労

をかけましたこと何とも申訳ありませんが、その辺は御諒察に委ねるとしまして 二三日前お電話いたしました時申上げました点 即ち前の手紙に書き渡らした古典語の学力について補足いたします 藤田君は東大在学中にクレスラー氏及びアンベールクロード（アンリ先生）師から希・羅両方の手ほどきを受け 私が講師在任中 直接相手は致しませんでした が 時々質問を受けた時 殊に羅典語については Sallustius の Bellum Catilinae などを持って来た具合から見て 学生として相当なものだといふ印象を得てをります。その後 岩波文学に（別に私の拙著とは関係なく）収められたマレイの「希臘宗教発展の五段階」の附録になってゐる（同じやうで紛らわしい名ですが）sallustios の混乱した現存本文の翻訳を試みた時には、希臘語について同様の感じを持ちました。現代語訳の揃ってゐる大思想家の作品は内容それ自身の難易を別にすれば かういふ二三流の断片に比し遥かに容易だといふことになります。卒業論文になったラスクの著作は量からいふと小さなものですから 怠惰な学生が好んで選んだものですが、藤田君の論文は手堅い読み方を十分に買ふことができたといふ記憶があります。私ばかりほめてゐても始まりませんので 日頃点の辛い田辺先生の書束を示されたまゝに一時借用してお目にかかることに致します とりあえず以上のみ 草々

三月廿六日

與一

野口明様 座下

（追伸）因に田辺先生と藤田君との交渉は未刊ヘーゲルの哲学史の翻訳に際しテキストの打合せから生れたもので個人的な面識は殆どないと思ひます。成城高校では一時生徒課長をしてゐた為 一部の子弟には評判がよくなかったかも知れません。しかし親しく接した人々は その後もずっとなつてゐることを申添へます。

#### 4-2 茂吉の「失策」

④当時、先生があまりに気さくなので、私はうっかり自分の文学志望のことを話してしまったこともあった。すぐあと休みに帰省する際に気づいて大いに慌て、また父に密告されてはたまらぬから、仙台駅の構内で「ぼくは酒も煙草もやらず、文学などはまったくやらないことになっていますから宜しくお

願います」というようなハガキを書いて投函した。

もちろん先生は、他の人のようにそんな余計な密告をする人物ではなかった。そればかりか、私が大学3年ころの夏、箱根で父と二人きりの気づまりな日を送っていると、だしぬけに小包を送ってきて、中には禁制品の煙草が入っており、

「宗吉君ももうそろそろ煙草を吸ってよい年齢でしょう」

という意の手紙がついていたため、さすがの父も折れ、河野先生がそう言われるならという、以来私は大っぴらに煙草を吸える身の上になった。

こういう先生を息子の保証人に頼んでしまったのは頑固一徹な父にとって失策といえようが、大いに感謝すべき失策であったことは間違いない。

#### 4-2-1 【人】河野與一（この よいち 1896-1984） 在職：法文学部・文学部 1929-50

横浜の出身。第一高等学校、東京帝国大学文学部哲学科を卒業後、第三高等学校で語学、法政大学で哲学を教える。昭和4年に30歳で東北帝国大学法文学部助教授（仏文学担当）となり仙台に赴任、下宿先の家が同じだった中村多麻と出会う。留学から帰国した昭和12年に結婚し、多麻の勤務の関係もあって東京と仙台を往復する生活が続ける。戦争中は宮城県北部の築館の知人宅に疎開する。戦後、哲学専攻の教授（西洋古代中世哲学史担当）となるが、昭和25年に東北大学を辞し、岩波書店に迎えられ顧問となった。

博学と深い教養で知られ、外国語は「二週間先に始めれば何語でも教えられる」と伝わっている。主要な訳書として『アミエルの日記』、プルターク『英雄伝』など、著書としては短文を集めた『学問の曲り角』（正・続）がある。逝去の後、知人たちによって『回想 河野與一・多麻』（1986年）が編集された。

#### 4-2-2 河野多麻（この たま 1895-1985）

旧姓中村。静岡県出身。小学校や高等女学校の教員で暮らしながら苦学し、大正7年に東京女子高等師範学校（お茶の水女子大学の前身）を卒業する。その後、東京帝国大学の聴講生を経て、女子にも門戸を開いた東北帝国大学の法文学部国語学科に入学した。昭和6年に卒業した後は、東京の実践女子専門学校（実践女子大学の前身）に勤め、結婚後も昭

和18年まで勤務を続けた。戦争が激しくなったため、辞職して宮城県に疎開し、以後は夫婦同居となった。夫・與一は家事全般に通じ、献身的に妻の研究を支援したと伝えられる。『土佐日記』や『宇津保物語』を研究対象とし、後者は「日本古典文学大系」として刊行された。昭和50年に、東北大学から文学博士号を授与されている。與一が逝去した翌年、不慮の事故（失火）のため永眠した。

#### 4-2-3 河野 與一葉書（柴田 治三郎あて）

①昭和50年（1975）3月29日付

②昭和51年（1976）4月26日付

いずれも、河野夫妻と北杜夫などの交流を示している。昭和50年のものは、4月3日の結婚記念日の会にふれて、今年は河野が招く番で、北夫妻のほか兄の斎藤茂太夫妻や、母の斎藤輝子も招くことを記している。翌年のものは、「今夜は北杜夫夫妻に招かれて少々飲みました」とある。（史料館・柴田文書）

##### 【翻刻】

①二度も電話をありがたう。御軽快におなりで何よりだった。凶事の話は取止めにして、三月十五日（Julius Caesar の idus の日）に末の妹の娘の結婚式があった。今日はたま子の甥の息子が最近見つかったお嬢さんを紹介しに連れて来た。Stewardess を勤めた由、いい子だ。四月三日が宗吉夫婦（而して我々老夫婦）の結婚記念日で、毎年交互に招いてゐるが、今度は茂太夫妻と輝子刀自も招く。その翌日から一寸熱海へ行かせてもらふ。

②御手紙拝見。五月なかばにあなた任せの旅に出ます。真方君と会ってゐるうちに、そんな事になってしまいました。先週は熱海で過ごしましたが、風邪気味で入院同様でした。金曜日ひる帰京。日曜日岩波さん満三十年忌。今夜は北杜夫夫妻に招かれて少々飲みました。五月十日は先約があるので欠礼。いずれお話しします。

#### 4-2-4 河野 與一 旧蔵マント

（年代未詳）

渡邊健治氏寄贈。（史料館・柴田文書）

#### 4-2-5 【写】仙台の風景 広瀬川

#### 4-2-6 【写】仙台の風景 仙台市公民館

### 5-1 文学を志す

斎藤茂吉の息子として、本名では文学活動が出来ないために編み出された筆名が「北杜夫」であった。最初に使用されたのは、散文の「百蛾譜」(『文芸首都』昭和 25 年 4 月号)で、続けて 10 月号に「狂詩」が掲載された。

実はその前に、「北宗夫」の名で発表された作品があった。初めて活字になった詩「あの頃の歌」(『文学集団』1-6、昭和 23 年 10 月号)などである。

「北杜夫」は、ほどなく『文芸首都』の同人となり、「牧神の午後」「狂詩」「パンドラの匣」(すべて 26～27 年掲載)を発表するとともに、田畑麦彦、佐藤愛子、なだいなだ等の同人仲間と親しく交わった。

この時期に書き続けられたのが、初期作品の集大成ともいべき『幽霊』である。昭和 28 年 2 月末に、父・茂吉が逝去した。その年の 5 月、連載第 1 回が『文芸首都』に発表されている。昭和 29 年に完成し、まもなく自費出版されたが、経費節約のため田畑麦彦の『祭壇』と同一装丁で同時刊行となった。

**5-1-1 【写】北宗夫のペンネーム**(「あの頃の歌」『文学集団』10 号、昭和 23 年 10 月号、日本近代文学館所蔵)

**5-1-2 【写】「北杜夫」名で最初に活字になった作品**(「百蛾譜」『文芸首都』昭和 25 年 4 月号、日本近代文学館所蔵)

### 5-1-3 「北杜夫」の誕生

たとえば谷崎潤一郎とか、志賀直哉とか、大文豪ってのはみんな立派な名前持ってらっしゃるでしょう。ところがそれになりたくないと思ったの。終戦後、そうした文豪がちょっとした随筆みたいなものを書く、と、活字でつかくして載せるわけね。いかに大家でも、中にはくだらないものもあるわけよ。名前だけでそうするのはけしからん。名前は非常に貧相なものをつける、という主義で、東西南北を順繰りにつけようとした。松本とか仙台とか、寒いところから、まず北とした。杜夫ってのは、マンの小説の『トニオ・クレゲル』、僕が小説家になろうと志望したのは、この小説のせいなんですから、トニオをもじって、杜のあとに二夫をつけてトニオと読ませたわけね。同人雑誌に投稿するとき、幾らな

んでもへんてこだから、二をはずして杜夫としたの。それが最初に活字になったんで。

(『快妻オバサマVS躁児マンボウ』Part II より)

### 5-1-4 創作ノート

昭和 20 年代

北杜夫の自筆。『幽霊』の草稿が見られる。(世田谷文学館所蔵)

### 5-2 どくとるマンボウ

東北大学医学部を卒業し、慶応大学医学部の医局に移った後も、着実に作家活動が続けられた。この頃の様子は、『どくとるマンボウ医局記』に詳しい。

昭和 31 年下半期、昭和 32 年上半期に芥川賞候補となったが、あえなく落選(31 下は該当者なし、32 上受賞作は菊村到『硫黄島』)。諸般の事情で船医となり、昭和 33 年 11 月から翌年 4 月まで欧州方面を廻る。リュウベックでは念願だったブッデンブロークの家を見、パリでは親友の辻邦生と再会する。後に妻となる横山喜美子と知り合ったのも、この航海中であった。

帰国後、昭和 34 年上半期の芥川賞候補となったが、またも落選(受賞作は斯波四郎『山塔』)。その頃、十二指腸潰瘍を患い、また「夜と霧の隅で」が難航して苦しんだことから、気分転換を図り、航海中に『文芸首都』に連載していた「船上にて」をまとめる。昭和 35 年に『どくとるマンボウ航海記』と題して刊行され、たちまちベストセラーになった。同年 7 月、「夜と霧の隅で」で昭和 35 年上半期の芥川賞を受賞。……そこから後は、皆様ご存知の通り。

### 5-2-1 【写】芥川賞受賞の新聞記事

### 5-2-2 【写】リュウベックのブッデンブロークハウスと T・マン

### 5-2-3 北 杜夫 博士論文

昭和 35 年 7 月

北の博士論文は、主論文 1 本と副論文 2 本からなる。そのうちの主論文である斎藤宗吉「精神分裂症における微細精神運動の一考察」(『慶応医学』37 巻 7 号掲載)。精神分裂病患者の筆圧を正常者と比較することの有効性を主張している。(医学分館所蔵)

## 5-2-4 マンボウ・マブゼ共和国 紙幣など

昭和 55 年 (1980) 以降

激しい躁病となった北杜夫は、自宅を「マンボウ・リューベック・セタガヤ・マブゼ共和国」として、日本から独立し自ら主席となることを宣言した。憧れの地リューベックの地名が組み込まれている。

紙幣は谷内六郎の画で、1 万・10 万・50 万の三種が制作された。交換レートは 1 マブゼ = 1 円とされた (北杜夫氏寄贈)。

その後、2000 年秋の「北杜夫」展 (世田谷文学館) において、北主席あてハガキと、正式な VISA を模したスタンプが作成された (宇留賀一夫氏寄贈)。

(すべて史料館所蔵)

## 5-2-5 いろいろに使える万能ハガキ 2 通

平成 10 年 (1998) 正月前後 / 同 12 年 11 月

高校・大学の同級生であった宇留賀氏寄贈資料。平成 12 年 (2000) 9 月から 11 月にかけて、世田谷文学館で「北杜夫」展が開催されていた。(史料館所蔵)

## 5-2-6 【人】斎藤由香 (さいとう ゆか 1962-)

東京都出身。エッセイスト・会社員

昭和 60 年に成城大学文学部国文学科を卒業後、(株) サントリーに入社。最初は広報部に配属され、広報誌の副編集長をつとめる。平成 13 年に健康食品部に異動し、「マカ」の大ヒットを生む。同 21 年からサントリーホールディングスの (株) アドギア勤務。

平成 14 年から週刊新潮に「窓際 O L すってんころりん日記」を執筆し、現在も連載中。

祖父は歌人・斎藤茂吉、父は作家・北杜夫。

著書に、『窓際 O L トホホな朝ウフフな夜』『窓際 O L 会社はいつもてんやわんや』『窓際 O L 親と上司は選べない』、茂吉の妻である祖母・輝子の生涯を描いた『猛女とよばれた淑女』、父との対談『パパは楽しい躁うつ病』などがある。

## 5-2-7 ポスター解説

ドイツの作家トーマス・マン (1875-1955) の代表作で、1901 年に発表され、1929 年にノーベル文学賞の受賞をもたらした小説『Buddenbrooks ; Verfall einer Familie』(邦訳: ブッデنبローク家の人々—ある一家の没落—) は、過去 2 度映画化されている (1923 年と 1959 年)。ここに展示しているのは、2008 年の 12 月 25 日にドイツ国内で公開された、3 度目の作品のポスターである。

日本では、ドイツ映画祭 2009 (東京) の中で 10 月 15 日と 16 日に公開される予定。

## 【追記】

(1) 展示会場で配布したパンフレットの記載に、以下の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

3 頁「松本高校出身 4 名の入学時の写真」(誤) 前沢譚 (正) 前沢澪

4 頁「入学式宣誓書」(誤) 河野肆向が (正) 河野肆尚が

(2) 展示資料のうち「4-1-1 河野夫妻書簡」については、拙稿「〈資料紹介〉東北大学史料館所蔵 河野與一・多麻書簡〔1945 年〕10 月 19 日付 斎藤茂吉宛」(『東亜細亜出版文化研究』国際学術会議講演・論文集』韓国・高麗大学校、2009 年、p165-173) に影印と翻刻を掲載しました。

(3) 本展示の開催においては、北杜夫先生ご一家をはじめ、世田谷文学館、日本近代文学館、あがたの森文化会館などの資料保存機関や、学内外の多くの方々にご協力賜りました。東北大学生協片平店の書籍部では、展示期間中に斎藤一族のコーナーを設け、講演会には出張販売もして下さいました。改めて御礼申し上げます。その一人の石田名香雄先生 (113 頁参照) は、2009 年 12 月 4 日に逝去されました (86 歳)。謹んでご冥福をお祈りいたします。